

医療機器産業研究所 スナップショット No.27 「2025年及び2040年の医療機器市場の推計値から今後の産業を考える」

公益財団法人医療機器センター 専務理事
医療機器産業研究所 所長 中野 壮陸

はじめに

わが国の医療機器市場は、2015年時点で約2兆7500億円とされる。2005年は約2兆1100億円であったので、年平均成長率(CAGR)は2.7%となる。今後のわが国の医療機器市場は一体どの程度成長するのであろうか。本稿では大胆かつ簡易的な概算を用いて2025年及び2040年の医療機器市場の推計を試みたい。

推計方法

将来の医療機器市場の推計にあたっては、過去の経験知と将来の医療費を用いる。過去の経験知とは、[リサーチペーパーNo.8](#)で観察した医療費と医療機器市場の関係ある。つまり、医療費総額に占める医療機器市場の割合は平均6.3%で推移しており、1984年から2010年で大きく変化なく、ほぼ一定となっている(最大6.8%、最小5.9%)。医療費や医療機器の概念が異なるものの米国は6.0%、欧州は6.3%とされており、医療と医療機器の費用面については諸外国でも一定の関係が見られる。

一方、将来の医療費については、[平成30年第6回経済財政諮問会議](#)で紹介された将来の医療給付費を用いた。当該資料によれば、将来の医療給付費は、年齢階級別受療率等に将来推計人口を適用して需要を推計し、サービスごとの単価、伸び率等を適用していると説明されている。言い換えれば、患者数などの需要を基礎とした計算となっており、供給面については必要な需給をちょうどまかなうだけの供給が行われるものと仮定して、必要マンパワーや費用等を計算しているものである。当該資料は、高齢者人口がピークを迎える2040年頃を見据え、社会保障給付や負担の姿を幅広く共有するための議論の素材を提供するために、一定の仮定をおいた上で作成されたものであり、詳細は当該資料を参照頂きたい。ただし、将来の医療給付費は、主として保険料負担と公費負担であると考えられるため、財源別国民医療費の「その他(主に患者負担)」を加えることで、将来の医療費を簡易的に算出している。

即ち、わが国の医療機器市場の将来推計は、将来の医療費の6.3%相当額になるものと仮定し、算出したものである。

2025年及び2040年の医療機器市場の推計結果

推計の詳細情報等は紙面の関係で省略するが、2025年の医療機器市場は3.4兆円、2040年は4.7兆円となった。2018年(2.8兆円)に対するCAGRは2025年が2.9%、2040年が2.4%となった。推計方法が将来の医療費をベ-

スとしていることから、当然ながらその6.3%に相当すると仮定した医療機器市場は需要側からの要求結果として一定割合において成長する推計結果となる。従って、比較的新しい産業であるITやIoT産業のCAGRに比べると見劣りするかもしれないが、従来から存在する産業としては比較的高い結果となった。ただし、医療給付費や医療費の推計値は、現実には下振れすると知られていることにも留意が必要である。

推計結果からの一考察

医療機器産業は全体として今後も成長していくが、その内部構造が将来も同じであるかという点では別な見方もできる。1980年代の医療機器市場は、32%が診断系に関する市場で、27%が治療系に関する市場、残りの約4割を個人用とその他の機器が占めていたが、現在は、51%が治療系、17%が診断系、残りの約3割が個人用とその他の機器となっており、診断機器から治療機器へと市場構造が大きく変化している。市場構造の変化はいわば医療ニーズの変化であり、現在の医療は治療に対する期待が大きくなってきていることが端的に示された結果となっている。一方、製品の競争力の源泉となる特許に着目すると、[日本への登録件数](#)が2001~2005年の合計で26,250件であるのに対し、2015年では11,860件となっていることから、単年では約2倍に増加していると解釈される。他方、製品上市の目安となる許認可件数は、2017年度の承認502件、認証882件であったが、5年前の2012年度は各々590件、1,437件であり、徐々に許認可件数が減少している。つまり、開発競争は激化しているが、製品数は減少傾向にあるということである。

医療である以上、治療に対する期待が今後も大きくなることは論を俟たない。他方、医療の置かれている状況は、急速な少子高齢化、ケアニーズの変化、費用対効果評価の推進、地域包括ケアシステムの構築・医療機能の分化・強化、医療と介護の連携の推進等と大きく変化していく。即ち、医療機器を取りまく環境の大きな変化と相まって、産業内部の市場構造がこのままの関係となっていくとは考えづらい。とはいえ、急な変化が起こるものではなく、それは動脈硬化等のサイレントキラーのように気付かぬうちに静かに進行し、気づいたときには取り返しの付かない状態になる。かつての診断機器から治療機器への変化も徐々に進行した結果である。

医療機器単体のみならず、ICT・ビッグデータ連携への期待もあり、今後何が登場し、何がメインストリームとなっていくのかは全くわからない。ただわかっているのはこのままの延長線に未来はないということであろう。